

# 佇立する恐怖

## 上水敬由

暗闇の中で長いエンドロールが流れ続けるのをほとんどの観客がじっと座ったまま見つめていた。

たいていの場合は終演と同時に立ち上がり、手荷物を小脇に抱えてそそくさと入り口へむかうのだが、なぜかこのときには場内に何となく重苦しい空気が満ちていて、いつもの観劇後のお手軽な達成感は何れなかった。

おそらくそれは我々がこの春以来肌身に沁みてきた、ありふれた日常に突然襲いかかる大地の震えに対する不安感が、銀幕の向こう側から繰り返し伝わってきたからだろう。

たとえ制作者にその意図はなかったにしても。

作品は「時代の子」であるという。

作者が意識するしなやかかわらず、ある作品の背景には

その時代の共通認識が明確に現れている。

一九五四年の第一作が冷戦下に行われていた核実験をもとに構想されたということは事実であるにしても、巨大な力に破壊される街の姿や人々の日常生活の壊れやすさが、ついでこの間までそこにあった戦場の記憶とじかにつながっていたことを見落としてはならないと思う。

そしてそれこそが当時として驚くべき観客動員数を実現した理由なのだ。

かの獣の吠声とその作り方がときおり話題になるが、実のところは、それよりも間をおいて響きわたる足音の方が観る側に大きな衝撃を与えていることを、評者は強調すべきだろう。

それはある者にとっては艦砲射撃の咆哮であり、爆撃機が落としていくボムの破裂音であり、破壊された建造物の崩壊する音である。

そしてそれらの奥底にあるのが、どう抗いようもない強大な力そのものへの無力感と恐怖だろう。

一九五五年一月一七日に遠く離れた街で、テレビ画面の上手から微かにあがった煙が、音もなくじわじわと範囲を広げていく様を見つめていたときの何ともしれないいらだち。

それは昔、カンボジアの留学生と一緒に行った、狭いなが

らも繁盛していた中華食堂がそこにあつたから、そしてその記憶が失われそうだったからというのではない。

同じく二〇一一年三月一日にも、ふたたび遠く離れた街で、自衛隊機が撮影した、太平洋に向かって延々と続く砂浜に押し寄せてくる白い津波の列を、ただひたすら眺めているしかなかったときの腹立たしき。

それも、かつて定年を迎える友人と訪れたことのある、松島のカキ小屋のことを心配していたためというわけではない。要はどうすることもできない自らの無力に対するやりきれなさだ。

無力感というやつがどこから来るのか、たとえば『遠野物語』の「猿の経立」を思う。

「栃内村の林崎に住む何某という男、今は五十に近し。十年あまり前のことなり。六角牛山に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、猿の経立あり、これを真の鹿なりと思ひしか、地竹を手にて分けながら、大なる口をあけ嶺の方より下り来たり。胆潰れて笛を吹きやめたれば、やがて反れて谷の方へ走り行きたり。」

この話からは「猿の経立」の具体的な姿はわからない。わからないが、男の感じた恐怖だけは伝わってくる。

そして近在の村では、聞き分けのない子どもを「六角牛の猿の経立が来るぞ」と叱りつけるといふ。

ここに摘出されているのは、何かわけのわからないもの、ある意志の固まりのようなもの。

それに対してじっと動きを止め、ただ見つめるほかに術がないという男の無力感なのだ。

酷暑の続いた夏の終わりに宇城市のショッピングモールまで出かけたのは、熊本市とその近郊の映画館がほとんど壊滅状態にあつたからだ。

全壊した住宅や一階が押しつぶされたビル、瓦の飛ばされた屋根をブルーシートで覆った家並みや倒壊したブロック塀、いたるところが沈下してひび割れた道路、そのために浮いてしまった橋やマンホール、河川の堤を補強する目的で置かれた大きな土嚢の黒い列など。

今ではすっかり見なれてしまった景色の中を、ごく小さな損害をこうむった「被災者」のひとりとして、特にどうという感慨もなくドライブすることにしたのだ。